

相模原市緑区千木良の障害者施設「津久井やまゆり園」で元職員の植松聖容疑者が入所者19人を殺害した事件から26日で半年。同容疑者が衆院議長への手紙に書いた「障害者に生きていく意味はない」との言葉に対し、障害者福祉に関わる人たちは声をそろえて反論してきました。同園の地元でも、事件の意味を考え続ける取り組みが続いています。

障害者殺傷事件から半年

意味なき命はない

同園に約30年勤務し、今も近くに住む女性が事件を振り返ります。

考える場

「家族のように感じていた入所者が犠牲になり、本当につらかった。少しは落ち着いたけれど、『障害の

23日の「津久井やまゆり園」正門前。献花台撤去の説明と献花への感謝が書かれた掲示があります



ある人は必要ない』などと
いう考えから命を落とされた
方が気の毒すぎる。この
ことについても納得がい

「私が接した入所者はみ
かない」
そして、こどもも強調しま
した。

相模原障害者施設殺傷事件 2016年7月26日未明、相模原市緑区の障害者施設「津久井やまゆり園」に元職員の植松聖容疑者が侵入し、入所者を次々に包丁で刺した。19人が死亡し、職員を含む27人が重軽傷を負った。同容疑者は神奈川県警津久井署に出頭。殺人容疑などで逮捕され、同年9月から鑑定留置されている。

んな裏表のない、まっすぐ
に感情を表現する人たちが
いた。教えられたことも多
い。『必要ない』どころか、
いてこそ正常な社会なん
です」

事件後、衝撃を受けた地
域住民の間から「この地で
事件を考え、社会や政治を
考えよう」との声が上がり
ました。近接地区に住む宮

「共に生きる社会を考える
会」が発足。昨年10月と11
月に会合を開き、それぞれ
近隣住民20〜30人が参加し
ました。

「事件で差別や優生思想
の問題を突き付けられた。
分断に向かうのではなく、
共に生きるしかない。それ
を一人ひとりの問題として

考える場にしたかった」と
宮崎さんは語ります。今
後、世話人態勢などを整え
て長期的に取り組む方向で
す。

自問自答

2度目の会合で、ある女
性が「子育て時代に地域に
園があり、小学校の運動会
には入所者が参加した。子
ども2人は成人し土地を離
れたが、今も障害者に違和
感を持たない。園のおかげ
だ」と趣旨の発言をした
といいます。

「ここには間違いなく、
園があることを前提とした
地域社会がある。人によっ
て関わりの濃淡があっても
概には言えないけれど、私
たちは今後も、障害のある
彼ら彼女らとこの地域で生
きていく」
事件が刑事裁判として処
理されるだけでは解決にな
らないとの思いもありま
す。匿名を望んだ遺族の思
いも気にかかります。

「障害者やその家族が口
を開けないような空気はな
いか。なぜこの事件が起き
てしまったのか、園自身
も、監督する県も、社会の
一人ひとりの、何ができた
か、何ができるかを自問自
答する必要があります。私たち
地元も、その過程にありま
す」

この地で共に生きる

「改めて、よかったと思
った。地域が園を支えただ
けでなく、園からも多くの
ものを受け取った」と言い
ます。

障害者殺傷事件から半年

意味なき命はない

Ⓜ

相模原市の障害者施設で暮らす多くの障害者を植松聖谷疑者が殺傷した

事件は、多くの障害者やその家族を深く傷つけました。

命つなぐ

赤ちゃんのときの事故で重度障害を負った西原海(かい)さん(27)は、広島県東広島市は、まばたきができません。食事は口からは取れませんが、意思表示も困難。家族や仲間、わずかな表情の変化で思いを読み取ります。だけど、自分ら

しく暮らしたいと命を紡いでいます。

「昨年7月25日に、海くん(中央)の2人目の子が生まれたんです。2人目の孫が生まれたと喜んでいたら、その翌日にあんな事件が起きて…。1カ月ほど落ち込みました」

海さんの母親、由美さん(57)は、6カ月の孫をあやしむが話します。3人きょうだいの末っ



海さん(中央)を囲む(奥左)由美さん、めい(2歳)、おい＝広島県東広島市

子だった海さんは1歳7カ月のとき、保育園で水を張った洗濯機に転落。呼吸と心臓が停止し、酸素が脳にいかず「植物状態」に陥りました。

由美さんは「海くんは医学的には『生きています』だけ」ということになるでしょう。だけど、27

自立の力

使館前でイラク戦争反対のアピールを行いました。ハワイに数回旅行するなど、多くの人の支援を得て豊かな経験を重ねてきました。

「多くの人を借りながら生きることが、海くんにとっては『自立』につながるんだと思います。障害があることは迷惑じゃない」と由美さん。「めいとおいがいる海くん。2人のおじさんになったけど、地域のおじさんにもなりたいね」

地域とつながり、活躍

(つづく)

障害者殺傷事件から半年

意味なき

命はない

①

赤ちゃんのとときの事故で重度の障害を負った西原海(かい)さん(27) Ⅱ広島県東広島市Ⅱ。「今年、1人暮らしに向けて準備をすすめていきたい」と母親の由美さん(57)は今、こう考えています。

挑戦の年

自力で体を動かすことも意思表示も困難な海さん。呼吸できるよう数時間ごとに、たんの吸引が欠かせません。口から食べるのができないため食事は、おなかに穴を開

由美さんは「海くんは話すことはできないけど、新しい人間関係や環境に反応します。どれだけ自宅と同じような環境にできるか不安はあります」と話します。「それでも、親元を離れたい年頃だし、海くんは1カ月でも2カ月でも挑戦してみたいんじゃないかな」海さんのような重度障害者の1人暮らしを支えるサービスに、障害者総合支援法に基づく「重度訪問介護」があります。

海さんが働くNPO法人「地域ネットくれん」Ⅱ同県呉市Ⅱの事業所でも、職員が昼ご飯を一品ずつ、メニュー名を海さんに伝えながら注射器で与えていました。

居宅での身体介助や家事支援、見守りなど生活全般にわたる支援と外出時の介助を総合的に行うも



海さんⅡ広島県呉市

潜む意識

「制度上のサービスは整っています。問題は、重度訪問介護を24時間支給する自治体がほとんど

車いすに乗り店番をする海さんⅡ広島県呉市

ないことと、サービス単価が低いことです。低単価のため重度訪問介護を実施する事業所は多くない。「くれんど」の代表理事、小河(おごう)努さんは、こう指摘します。

「重度訪問介護の低単価は、『障害者にお金をかけるな』という国からのメッセージでしょう。この問題を解決しなければ、相模原事件の植松聖容疑者と同様の『重度障害者は邪魔な存在だ』という社会に潜む意識は変

えられないのではないかと」

障害のない人は、誰でも暮らすのかを自身で選択することができません。「障害があると多くの場合、家族との生活しか選択肢がない。障害者を支える人がいなければ、植松容疑者の言葉のように『生きる意味はない』となるだろう」と小河さん。

由美さんは訴えます。「海くんは人に支えてもらうだけでなく、私たちが家族やいろんな人たちに多くのものを与えてくれています。障害のある人がその人らしく暮らすために、真の福祉制度が必要ですよ」

真の福祉制度が必要

(おわり)

(この連載は安川崇、岩井亜紀が担当しました)